

# 高大接続改革を追う ▶▶▶ 第19回

このコーナーでは高大接続改革に関するトピックスと、大学の個別選抜を紹介する。

Part1は、文部科学省「大学入試のあり方に関する検討会議」の第5～9回の内容を中心にレポートする。Part2は、2021年度入試の個別学部日程（一般選抜）の大学独自試験で、記述式や小論文を課す入試を行う青山学院大学の取り組みを紹介する。

## CONTENTS

### Part 1

◆ 高大接続改革のトピックス ..... p44

### Part 2

◆ 青山学院大学 ..... p47

## Part 1

### 大学入試のあり方に関する検討会議は 委員と外部有識者・団体による発表が中心

今回は、文部科学省「大学入試のあり方に関する検討会議」(以下、検討会議)の第5～9回までの概要を見ていく。これまで検討会議の委員の意見発表と、外部有識者・団体へのヒアリングが行われており、2025年度入試に向けた方向性はまだ見えていない状況だ。以下、委員や外部有識者の発表を抜粋してレポートする。なお、6月中旬現在、検討会議はWeb会議で実施されており、会議の様子、発表資料、検討会議の意見の概要等は公表されている。詳細は文部科学省のホームページをご覧ください。

第5回は、4名の検討会議の委員の発表のほか、検討会議の議論に多様な意見を反映させるための外部有識者・団体からのヒアリング内容の検討が行われた。

島田康行委員(筑波大学人文社会系教授)は、「共通テスト『国語』記述式問題について」と題して発表。大学の初年次教育でも文章・論文の書き方に関する指導が行われ、その内容に高校までの教育課程の内容も含まれていること。多くの大学が対応に苦慮しており、書く力・論じる力の育成は必要との考えを示した。ただ、大学入学共通テスト(以下、共通テスト)で実施予定だった条件付記述式問題では、高大接続システム改革会議の最終報告で求めていた目的は達成が難しいとしつつ、ボリュームゾーンの学力層には一定の意味があり、高校教員にも一定のメッセージは伝わったとの認識を示した。より多くのモデル問題を公表し、説明すべきだったがスケジュール上困難であったこと。記述式問題の採点でミスがあった場合、想定されていたスケジュールでは対応が困難であったことを指摘した。さらに、記述式問題は個別大

学で対応すべきだがそれが難しい大学もあるため、大学入試センターも交えて対応を検討すべきであると述べた。

京都市立堀川高校の校長を務めた荒瀬克己委員(関西国際大学基盤教育機構教授)は、これまでも高大接続改革の議論に関わってきた。そこで、これまでの議論の経緯や高校学習指導要領を踏まえつつ、大学入試改革についての考えを発表した。高大接続改革の主眼は、若者たちに生涯にわたって主体的に学習する基盤を培うことであること。共通テストと各大学の個別試験はセットであり、共通テストの役割として資格試験にすることを望んでいたこと。共通テストで段階的に評価し、その結果に対して各大学・学部が各教科の条件を設定して評価し、それをクリアした受験生に対して個別学力検査で丁寧に評価することを想定していたという。大学入試センターが、責任を持って英語4技能の評価や記述式問題へ対応できるようになれば多くの課題は解決されるのではないかと指摘したほか、大学入試が高校教育に与える影響の大きさを懸念しつつ、すべての受験生に機会が等しく用意されていることを前提とした制度設計にし、経費も含めて国が責任を持って進めてほしいと要望した。

### 大学入試センター理事長から センター試験の現状を説明

第6回は、外部有識者・団体からのヒアリングの内容、「大学入学者選抜における英語4技能評価及び記述式問題の実態調査」の内容などが検討された。続いて3名の委員、オブザーバーである大学入試センターの山本廣基理事長の発表があった。

清水美憲委員(筑波大学大学院教育研究科長)は、「大学入学共通テスト・記述式問題(数学)の導入をめぐる

諸課題」と題して発表した。大学入試センター試験（以下、センター試験）の数学の問題は、短期間での精度の高い採点、生徒の自己採点の一致度といった実際的な運用面において完成度が高い評価システムの中で、十分に機能していること。試行調査の問題は、数学的表現力を問う問題であり、従来評価していた数学的思考力と、数学的表現力をセットで評価することは重要であるとした上で、数学的表現力を限定的に共通テストに包含するか、個別試験で問うのかを考える必要があると述べた。

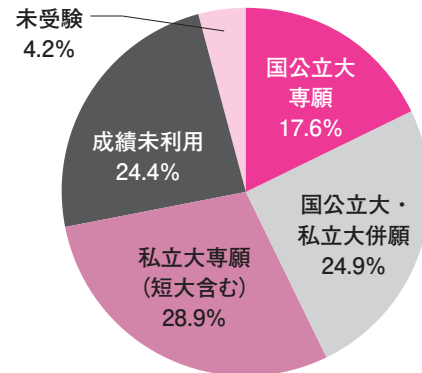
渡部良典委員（上智大学言語科学研究科教授）は、「共通テストと民間試験導入—CEFR、波及効果その他の課題を実証研究の成果をみながら検証する」と題して発表した。論点は、各種の英語の資格・検定試験が共通テストの代わりとなるかどうかであり、4技能測定のための英語の資格・検定試験は共通テストの代わりにはならないと説明した。

山本廣基理事長（大学入試センター）は、学力調査、資格試験、競争試験の3つの学力テストの目的を述べた上で、テストの要件は、信頼性（安定性も含む）、妥当性（測りたい学力を適切に測ることができるかどうか）、識別力が必要だと説明。求められる識別力は、3つの試験の目的によって異なると述べた。また、センター試験の利用大学数は開始当初に比べると約6倍に増加したが、センター試験の成績のみの合否判定は募集人員の約1割（2019年度入試）であること。新卒志願者の24.4%は成績を未利用である<図表1>といった実態のほか、センター試験実施の流れや、問題作成・点検体制、受験上の配慮と配慮決定者の増加などを説明した。また、センター試験は、出題科目の増加、受験パターンの複雑化、配慮のための取り組みにより、利用大学や大学入試センターにとって試験実施の負担やコストが極めて大きいと指摘。最後に私見として、各大学のカリキュラム・ポリシーに沿った教育を受けるのに必要な学力を有しているかを、大学の責任で判定する手段の1つが入学者選抜試験であり、高校までの学習指導要領の達成度を測ることは目的の一部にすぎないという考えを述べた。

### 外部有識者からのヒアリング開始 記述式問題としてリテラシーテストなども提案

第7回の冒頭、2021年度入試の総合型選抜および学

<図表1>センター試験新卒志願者の出願類型  
(2017年度試験)



(大学入試センター発表資料より)

校推薦型選抜の実施に関する配慮事項についての説明があった<sup>(注)</sup>。続いて、この回から外部有識者・団体からのヒアリングが行われた。

倉元直樹教授（東北大学高度教養教育・学生支援機構）は、『大学入試学』から見る高大接続改革」と題し、大学入試学、東北大学の大学入試に関する意思決定について説明したほか、これからの大学入試について考えを述べた。次に、日本若者協議会会員として、東京都と山口県の高校3年生の2人が意見発表を行った。高大接続システム改革会議の委員を務めた南風原朝和氏（東京大学名誉教授）は「大学入試改革—ここまでのふり返りと若干の提言」について発表した。

新井紀子教授（国立情報学研究所 社会共有知研究センター長）が「大学入学共通テストにおける記述式問題のあり方について」を発表した。新井教授は、大学入試は「1点刻みの競争」から「教育機会」に変容していること。センター試験の問題は成績上位層には易しすぎ、ボリュームゾーンには難しすぎるといった例をあげ、センター試験についての認識をアップデートする必要性を説明した。その上で、丁寧な記述式問題を課すことができる国立大学向けではなく、センター試験のみで入学する可能性の高い受験者に対して適切な出題ができていないか、適切な教育機会の提供に貢献し得るかを議論すべきだと訴えた。また「大学生数学基本調査（2011年）」を踏まえて、入試で記述式の数学を経っていない大学1年生は「極めて初等的な問題についての数学的説明力の欠如」が問題であることを指摘した。さらに、20万人の汎用的読解力調査（リーディングスキルテスト）の結果から、

(注) 2021年度入試の総合型選抜および学校推薦型選抜の実施に関する配慮事項については、河合塾の大学入試情報サイト Kei-Net「大学入試情報→入試・教育トピックス」に解説記事を掲載しておりますので、そちらをご参照ください。

中学生の半数以上が、中学校の教科書を自力では読めない状態で卒業していること。教科書が読めないからプリント学習や塾に頼らざるを得ず、経済格差や地域格差がそのまま学歴に反映されている状況だと述べた。また、リテラシー（科目によらない基盤的汎用的な読解力と記述力）が必要であり、共通テストで課することが重要であると説明した。その上で、共通テストにおける記述式の提案として、数学Ⅰ・数学Aでは、「読ませる問題」の出題と「式を書かせる問題」（多項式・多項不等式に限定）の出題、記述式の個別試験を行わない大学を対象にリテラシーを問う問題の出題を提案した。

最後に、大森昭生学長（共愛学園前橋国際大学）から、『地方小規模大学』『改革を進めている大学』の現場から」と題して発表が行われた。同大のような小規模大学でも、受験生全員と複数回の面接、丁寧なポートフォリオの読み込み、プレゼンテーションなどを実施することは困難で、実施するのであれば、受験生が不合格となった場合に他の大学へチャレンジする期間が担保されていなければならないと述べた。一方で、他の大学とも併願しやすい入試を実施しなければいけないとの現実を説明した。さらにすべての入試で学力の3要素を評価する必要があるのかと疑問を呈し、検討会議での議論は、選抜性の高い大学の入試についての議論ではないか、大学数では地方の小規模大学が多いことを指摘し、学力の3要素をすべての入試で測る必要性、主体性等評価、入試日程の見直しなども議論の観点とすべきことを提案した。

第8回では、文部科学省から2021年度大学入学者選抜について説明があった。続いて、吉田研作教授（上智大学言語教育センター長）が、英語の資格・検定試験について国として4技能（5領域）のテストを作成し、実施できれば最も好ましいと述べた上で、新型コロナウイルス感染症の影響も踏まえ、年数回の分散実施、CBTによるテストセンターを利用した入試の必要性などを説明した。また、資格・検定試験のCEFRを用いた標準化を第三者機関で行うことも提案した。中村高康教授（東京大学大学院教育学研究科）は、「高大接続で今考えるべきこと」と題して、教育社会学の立場から高大接続改革、主体性等評価、今般の入試改革をめぐる高校生への調査結果などを説明した。次に、代々木ゼミナール、東進ハイスクール、旺文社の3社から、英語の資格・検定試験の利用を中心とした発表があった。

<図表2> 2021年度入試 スケジュール（予定）

	日程	主なスケジュール
2020年	9月15日	総合型選抜出願開始
	11月1日	学校推薦型選抜出願開始
2021年	1月16日・17日	共通テスト第1日程
	1月30日・31日	共通テスト第2日程（第1日程の追試験）
	2月13日・14日	共通テスト第2日程の追試験
	2月25日～	国公立大学前期日程
	3月8日～	公立大学中期日程
	3月12日～	国公立大学後期日程

（詳細は、6月中に公表される予定の大学入学者選抜実施要項でご確認ください）

第9回も外部有識者・団体からのヒアリングが行われた。教育委員会の立場から埼玉県教育委員会教育長、NPO法人理事長から「吃音のある人への合理的配慮について」、東京大学近藤武夫准教授から「障害のある受験生と大学入試」について発表があった。さらに、河合塾と駿台予備学校、秋田県から熊本県まで6名の高校教員の発表が続いた。第10回も外部有識者・団体からのヒアリングが行われる予定だ。

### ▶ 共通テストは第1日程、第2日程を設定

6月19日に文部科学省から令和3（2021）年度大学入学者選抜実施要項が公表され、新型コロナウイルス感染症対策に伴う試験期日および試験実施上の配慮に関する内容が判明した。

まず、共通テストは、第1日程、第2日程として実施され（出願時に選択）、第2日程の追試験として2月13日・14日に特例追試験が行われる<図表2>。第2日程は新型コロナウイルス感染症の影響に伴う学業の遅れのための措置のため、既卒生は対象としていない。

個別学力検査においては、新型コロナウイルス感染症等に罹患した志願者の受験機会の確保のため、①追試験の設定、②追加の受験料を徴収せずに、別日程への受験の振替、のいずれか1つの方策を必ず講ずることを各大学に求めている。

さらに出題範囲について2年前程度の予告・公表の例外として、共通テストの科目指定について、例えば、高校3年生で履修することの多い、地理歴史、公民、理科の2科目指定を1科目に減じることや、指定科目以外の科目への変更を認めるなどの配慮を求めている。また、個別学力検査の出題範囲については、高校3年生での履修が多い科目（数学Ⅲ、物理、化学、生物、地学、世界史B、日本史B、地理B、倫理、政治・経済など）において、選択問題の出題や、「発展的な学習内容」から出題しないなどの工夫を求めている。各大学に、7月31日までに決定、公表することを求めており、講じた措置は文部科学省ホームページにも掲載される予定である。



## Part 2

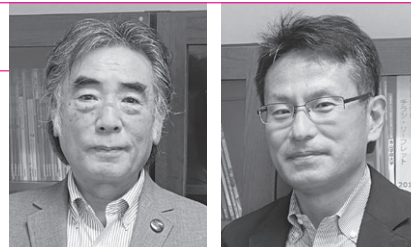
# 高校の学びと大学の学びをつなぐ入試改革

## 個別学部日程の独自試験では 総合的な問題などの記述式問題を出題し 受験生の自ら考える力を問う

### 青山学院大学

青山学院大学の2021年度一般選抜は、学部ごとに特色のある独自試験を行う「個別学部日程」が注目される。「個別学部日程」は、一部の学部を除き、大学入学共通テストと各学部の独自試験を組み合わせた方式で行われる。大学入学共通テストの教科・科目に加えて、独自の個別試験では「記述式を含む総合的な問題」または「記述式を含む個別科目問題」や「小論文」が課される。

すでに青山学院大学のホームページでは、出題の例示（サンプル問題）や出題の意図や狙い、入学者に求める力などの詳しい情報が公表されている。こうした入試改革を進める背景などについて、阪本浩学長と入学広報部入試課 鈴木博貴課長にお話をうかがった。



阪本浩 学長

鈴木博貴 課長

#### 個別学部日程は記述・論述形式の独自問題と 共通テストを併用する入試方式が中心

一般選抜では、募集人員が多い個別学部日程が中心となる入試方式と言ってもよいだろう。そして、最大の特色は独自の個別試験にある。学部によって出題内容は異なるが、記述式を含む総合的な問題、記述式を含む教科・科目の問題、小論文など学部によってさまざまな出題が予定されているが、記述・論述式の出題という点は各学部で共通している。

青山学院大学のホームページでは、各学部の出題の例示（サンプル問題）や出題の意図や狙い、入学者に求める力に関する情報が公開されている。例えば、文学部英米文学科（A方式）は共通テストで英語を課しているが、個別試験でも外国語（英語）を課す。そして、『出題の意図や狙い、入学者に求める力』として、従来の英語の問題に加えて『リーディングとライティングの力』、また『リスニングとライティングの力』を合わせて英語の理解力・表現力を複合的に問う問題を設定する」としている。

法学部の総合問題（A方式）は、科目としては、国語総合、世界史B（17世紀以降）、日本史B（17世紀以降）、政治・経済と複数の教科・科目が出題範囲となり、これだけを見ると受験生の負担が重く見える。しかし、『出題構成・特徴的な問題の例示等』を見ると、「（前出の地理歴史・公民の科目に関わる）長めの文章や図表を用いて、読解力、表現力および論理的思考力を問う出題」とある。さらに、「出題内容については、名称や用語をそのまま解答するための記憶力を問うものではなく、提示された文章や図表に含まれた情報を的確に把握・活用し、

#### 独自試験や共通テストを活用した 3つのパターンによる一般選抜

青山学院大学の2021年度一般選抜は、3つのパターンで行われる<図>。全学部日程は、共通問題を使用してマークシート形式で行われる3教科受験が基本だ。大学入学共通テスト（以下、共通テスト）を利用した入学者選抜は、各学部が指定する3～4教科を受験し、大学独自の試験は課されない。これは2020年度入試までの大学入試センター試験利用方式を継承するものと考えてよいだろう。

個別学部日程は、経済学部を除く<sup>(注1)</sup>全ての学部が共通テスト併用の方式を持つ。各学部が指定する共通テストの教科・科目を1～3教科受験し、その得点と各学部が出題する独自問題による個別試験の得点を総合して判定する。なお、国際政治経済学部と総合文化政策学部では、一部の学科・方式を除いて、英語資格・検定試験の結果が出願資格となっている。

(注1) 経済学部の個別学部日程は、共通テストを併用せず、独自問題による2教科型入試となる。このほか文学部英米文学科と理工学部の一部方式も併用方式ではなく、独自問題のみで実施される。なお、出願にあたっては、青山学院大学ホームページ等で最新情報をご確認の上、出願してください。

各科目の基礎的内容の総理解を有することを確認する」としている。つまり、総合問題で問われるのは教科・科目の知識ではなく、読解力、論理的思考力などである。

また、一部に基準点を設ける学科もある。例えば、教育人間科学部教育学科は、共通テストの英語と国語の合計点に基準点を設け、基準点に達した者のうち、小論文の得点の上位者を合格とする。ただし、これは共通テストの基準点以上の者だけを小論文の採点対象とするということではない。入学広報部入試課 鈴木博貴課長は「受験生が書いた小論文は全てしっかりと受け止めます」と二段階選抜を意味しているものではないと話す。また、文学部フランス文学科（B方式）も基準点があるが、こちらは総合問題（論述）に基準点を設け、基準点に達した者のうち、共通テストの外国語の得点の上位者を合格とする方式である。このように、個別学部日程は各学部の独自性が強く表れた選抜方式となっている。

**中教審答申が契機ではあるものの  
従来の入試に対する積年の問題意識が背景に**

阪本浩学長は、こうした入試改革に舵を切った理由の1つに、中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学

入学者選抜の一体的改革について（2014年12月）」（以下、高大接続改革答申）をあげる。

阪本学長は、「日本の教育全体を将来に向かって改革する上で、大学入試が改革を阻害する壁として影響していることの弊害が指摘されていました。確かにその通りだとその考えに共感したことが1つの出発点でした。さらに遡れば、共通一次試験<sup>(注2)</sup>、大学入試センター試験を始め、各大学が行う入試でもマークシート形式が主流になっていきましたが、本当にこれでよいのだろうかという疑問がありました」と話す。このような背景に加え、答申で、知識量を問う入試ではなく、思考力・判断力・表現力などの学力を評価すべきと示されていたことから、「これまで持っていた問題意識と合致した」（阪本学長）と入試改革への意を強くしたという。こうして、青山学院大学では入試改革に向けて動き出したのである。

高大接続改革答申では、学力の3要素への対応に加えて、各大学のアドミッション・ポリシー（以下、AP）に基づく入学者選抜の確立も課題と指摘されていた。そこで、青山学院大学として、総合問題、小論文に加え、教科・科目の問題でも、記述・論述式に重きを置くという大きな方針を示し、具体的な選抜方法については、各学部がそれぞれのAPに基づいて検討を進めることとした。この

<図> 2021年度 青山学院大学入学者選抜概要

入学者選抜種別	大学独自試験	大学入学共通テスト <sup>(※2)</sup>	英語資格・検定試験 <sup>(※3)</sup>
①一般選抜（個別学部日程） 学部・学科・方式により、右記[1]～[3]のいずれかの形態で実施。	[1] 独自問題 <sup>(※1)</sup>	大学入学共通テスト 学部・学科が指定する教科・科目の成績	
	[2] 独自問題 <sup>(※1)</sup>		
	[3] 独自問題 <sup>(※1)</sup>	大学入学共通テスト 学部・学科が指定する教科・科目の成績	英語資格・検定試験 【出願資格として利用】(提出必須) 国際政治経済学部（一部の学科・方式を除く） 総合文化政策学部（一部の方式を除く）
②一般選抜（全学部日程） 全学部・全学科、同一日に実施。	独自問題 (原則3教科・マークシート・共通問題)		
③大学入学共通テスト利用入学者選抜 全学部・全学科、右記の形態で実施。		大学入学共通テスト 学部・学科が指定する教科・科目の成績	
④学校推薦型選抜 ⑤総合型選抜 ⑥その他の選抜 学部・学科により右記[1]・[2]のいずれかの形態で実施。	[1] 独自問題 書類審査 面接		英語資格・検定試験 【出願資格として利用】(提出必須)
	[2] 独自問題 書類審査 面接		

(※1) 一般選抜（個別学部日程）の独自問題における出題の例示および意図・狙いは大学ウェブサイトを参照。  
(※2) 共通テスト「英語」の得点を扱う場合には、リーディング100点、リスニング100点の配点比率を変えずにそのまま合計して200点満点とした上で、各学科等が定める外国語の配点に換算して利用。  
(※3) 英語資格・検定試験の扱いに関する詳細は大学ウェブサイト等を参照。  
●上記①～⑥のすべての入学者選抜において、出願システムを通して「主体性・多様性・協働性に関する経験」等を入力することを出願時に求める。

(注2) 共通第1次学力試験の略。

(2021年度入学者選抜案内より)

ため、個別学部日程には各学部の独自色が強く反映されている。なお、ほとんどの学部が共通テスト併用方式となっていることについて、阪本学長は「基礎的な学力は共通テストで測り、それに加えて、各学部がAPで示した求める学生を選抜するための総合問題や記述式問題を、全力をあげて出題しようという考え方です。ただし、共通テストを課さないで、全ての試験科目の問題を自ら作るという学部もあります」と話し、各学部がそれぞれ求める学生を得るための選抜方法を熟慮した結果だと説明する。

### サンプル問題は、出題傾向のみならず 学習への取り組み方や入学後の学修内容も示す

各学部の出題の意図や狙い、入学者に求める力に加え、出題の例示やサンプル問題も全学部が公表している。阪本学長は「従来とは異なる入試方法のため、まずは多くの受験生に知っていただくために公表しました。ぜひ、高校1・2年生にも知っていただきたい」と話す。独自問題には各学部がどのような学生を求めているかという強い思いが示されており、早い時期からそれらに対する理解を深めてもらいたいためである。

「例えば、世界史で言えば、細かい年代や人名を暗記して選択肢から解答を選ぶような、言わばマークシート形式で知識を再生することを求めているではありません。歴史上のある事件が何年に発生したかということではなく、後に起こった別の事件とどのようにつながっているのか、受験生が自分なりに考えて、つなげて表現できる力を問うているのです。大事なことは考えることと書くことです。さらに言えば、フランスで19世紀に起きた事件について考える時、思考の枠組みを広げ、その当時の中国や日本の状況とも連動させて考えることができるような、そういった勉強の仕方をしてほしいのです」（阪本学長）。サンプル問題は、出題の傾向を示すにとどまらず、日頃の学習への取り組み方に対するメッセージまでも包含しているのだ。

こうした複合的な内容を問う総合問題は、採点する側の負担もかなり大きいのではないかと指摘すると、阪本学長は「各学部は、これから4年間、一緒に学ぶ学生を自分たちで選抜するという意識で改革を進めています。作問や採点は本当に大変ですが、覚悟を決めて取り組むということです」と改革への熱意を見せる。

### 入試改革と教養教育の充実により 高校までの学びと大学での学びの接続をめざす

個別学部日程の各学部による独自問題は、APを体現していると共にディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位

授与の方針、以下DP）にもつながっている。青山学院大学は2003年より、全学共通の教養教育「青山スタンダード」を実施している。教養教育と専門教育のつながりを橋渡しする同カリキュラムは、青山学院大学の卒業生であれば、どの学部・学科を卒業したかにかかわらず、一定の知識・技能を有していることを社会に対して保証する役割を担っている。今回の入試改革は、入学後の教育やDPも意識されているという。

阪本学長は「高校での学びを大学はしっかりと受け止め、4年間の学部教育で育て上げ、DPで示した人材を社会に輩出していくことが大切です。今回の入試改革は、そうした一連のつながりの中で行われています」と話す。めざしているのは、単なる入試改革ではなく、高校までの学びと大学での専門教育を円滑に接続するための、入試改革と教養教育のさらなる充実なのである。

なお、共通テストの英語は、全学部全学科でリーディング100点、リスニング100点のそれぞれ1対1の割合をそのまま扱う。その理由は、リスニングを重視する方針を尊重していることもあるが、本来は、共通試験として導入される予定であった英語資格・検定試験で4技能を均等に評価するという方針だったという。「共通テスト初年度は、2技能だけになりましたが、そもそも各技能を均等に評価するという理念でしたので、リーディングとリスニングだけになっても、均等に配点することとしています」（鈴木課長）

ところで、個別学部日程以外に、従来型の入試である全学部日程と共通テスト利用選抜も平行して実施する。このことについて、阪本学長は「高大接続改革は進行中の改革です。従来の受験勉強で入試に臨む受験生の方々もいることでしょう。自分に合った方式を選んで挑戦していただきたい。ただし、高校までの学び方が変化していけば、将来的には各学部の独自問題を中心とした入試に収斂していく可能性もあるでしょう」と理想実現への期待を語る。そして、「高大接続改革は教育全体にわたる改革です。大学と高校の両者が変わっていかなければ実現は難しいでしょう。

すでに初等・中等教育では、アクティブラーニングが重要視されております。一方的に知識を詰め込まれる学びではなく、自ら考え能動的に学ぶことによって汎用的な能力の育成を進めております。そして、大学入学者選抜では、しっかりと習得してきた力の評価をしていかななくてはなりません。

知識・技能だけではなく、思考力・判断力・表現力を共に育てていきたいと思っております。その上で、高校生には自分の個性が活かせる大学や学部を選んでほしい」と穏やかな口調ながらも力強く語った。